

学際的共同研究と知的生産

The Interdisciplinary Collaboration
and Intellectual Production

藤 本 ま す み

はじめに

聖泉論叢第4号(1996年刊行)においては、「知的生産と情報産業社会」について考えていることを述べた。それは、このテーマに関する一連の論考の総論にあたるものであった。

その締めくくりのところで「知的生産の組織化」という問題にふれ、これからは知的生産の共同作業化がすすんでいくであろう、と述べている。LANやパソコン通信の普及、インターネットによる情報ネットワークの構築、といった情報環境の整備が、個人のレベルにまでゆきわたって、今後は情報の共有化、知的生産の共同化・組織化が期待される、といった内容であった。

本稿では、そのような情報の共有化、知的生産の組織化を考える事例として、京都大学人文科学研究所西洋部における共同研究が、どのように展開されていったかを探る。学際的共同研究の組織とそこにおける知的活動について紹介し、あわせて研究組織の運営、知的生産と脳内現象の関係などについても考察する。

1966年から1974年まで、筆者は京都大学人文科学研究所、社会人類学部門の主任教授梅棹忠夫の研究室で秘書として働いていた。その間、研究者たちの周辺にいて、その日常活動の側面や、研究所の組織運営をつぶさに見る機会を得た。しかしながら、それ以前のことについては、文献や仄聞に依拠するほかはない。文献は主として梅棹教授による『研究経営論』¹⁾、および『人文科学研究所の五十年』²⁾である。

梅棹研究班の活動や学術調査隊の海外派遣については、直接知りえた

こともまじえて、そのあたりのことを跡づけてみることにする。知的生産者たちの系譜を知ることもまた、関連テーマの今後の展開に欠くことのできない過程であると考えからである。

- 1 京都大学人文科学研究所における学際的共同研究
 - (1) 大学における講座制と学際的共同研究
 - (2) 京都大学人文科学研究所の発足
 - (3) 桑原教授と学際的共同研究のはじまり
 - (4) 私的共同研究の誕生
 - (5) 今西研究班とアフリカにおける類人猿研究
- 2 梅棹教授の研究班とその運営
 - (1) 梅棹研究班の進展
 - (2) 梅棹班の共同研究会
 - (3) アモルファスな知的集団
 - (4) 研究班の運営母体と秘書システム
- 3 人文のフィールドワーク
 - (1) 京都大学アフリカ類人猿学術調査隊
 - (2) ヨーロッパ学術調査隊
- 4 学際的共同研究の運営
 - (1) 知的環境の整備
 - (2) リーダーの要件
 - (3) 研究活動の建前と本音
 - (4) 予算配分のプール方式
- 5 研究活動と知的生産
 - (1) 研究成果の社会還元
 - (2) 脳内現象と知的生産の関係
 - (3) 知的生産のツールと言語
 - (4) 電子ムラのコミュニケーション

1 京都大学人文科学研究所における学際的共同研究

知的生産の組織化といえ、研究活動が中心の研究教育機関である大学等での学際的共同研究がある。

本節では、学際的共同研究が必要になってきた経緯をふまえ、日本における人文科学系共同研究の先端を切ったところとして知られる、京都大学人文科学研究所の共同研究について、それが成立した時代から見ていくことにする。

(1) 大学における講座制と学際的共同研究

近代における知識の編成原理は、専門的領域の確立ということであった。大学はその要求に応じて急速に各専門的研究組織を整備し、専門家の養成に取り組んだ。19世紀から20世紀にかけての日本の知的世界は、いわば専門別の分断方式による細分化された学問分野の確立ということで特徴づけられる。

そのような知識の分割を、ほとんどその完成形態ともいえる状況にまで仕上げたのが、大学における「講座制」である。講座制はある種の歴史的役割をもっていたし、講座制による専門領域の設定は、職業的専門学者の養成という点では、効率のよいシステムであった。しかしその結果、あまりにも専門化がすすみすぎて弊害が発生し、それに対する批判がおこり、その反省として「学際的研究」ということがいわれはじめた。

学際的研究とは、専攻やや研究分野の異なる研究者たちが集まり、広い問題領域にたいして共通の関心をもちながら、専門の枠をこえて研究をおこなうものである。わが国では、自然科学の分野においては戦前からそのような試みがなされていたが、それが人文科学の学問分野にも広がったのは、主として戦後のことである。

(2) 京都大学人文科学研究所の発足

京都大学人文科学研究所は1949年、東方文化研究所（その前身は東方

文化学院京都研究所)、京都大学人文科学研究所および西洋文化研究所の三つが合体して、あらためて「京都大学人文科学研究所」として出発した。

新しい人文科学研究所は、東方部、日本部、西洋部の3部で構成されていた。建物は本館と分館に分かれており、北白川小倉町にある本館には事務室と東方部が、東一条の分館には日本部と西洋部が入っていた。1975年に東一条の分館が新築されたが、事務室がそちらに移ってきてからは、東一条が本館と呼ばれるようになった。

世間では、この研究所のことを略して「人文科研」とか「人文研」とか呼んでいるようであるが、所員や職員はより短く「人文」(じんぶん)といている。

(3) 桑原教授と学際的共同研究のはじまり

三つの研究所が合体して新しい人文科学研究所が発足したのは、1949年4月のことであった。発足と同時に、東北大学から桑原武夫が西洋部の教授として着任した。

共同研究は桑原教授の創案になるものであった。専門を異にする多数の研究者が集い、ひとつのテーマをめぐって、その専門的立場から研究に参加するという共同研究方式は、人文系の学問の方法としては、それまでほとんど試みられたことがなかった。

桑原教授は着任の翌年、1950年に京都大学理学部動物学教室の講師だった今西錦司を、西洋部の講師として迎え入れた。桑原と今西は京都大学山岳部を通じて旧知の間柄であった。山登りでチームワークのリーダーを経験している二人は、共同研究においても一致協力して、その力量を発揮した。

当時、桑原教授の周囲には、河野健二、鶴見俊輔、多田道太郎、樋口謹一など、俊英が群がっていた。後には会田雄次、上山春平が所員として加わった。さらに大阪市立大学理工学部に生物学の助教授として着任

したばかりの梅棹忠夫も、今西の紹介で桑原研究班の班員として仲間入りすることになった。

研究会は週1回、西洋部の教官の研究室がある東一条の分館2階の会議室で開かれた。桑原教授主宰による共同研究班の最初のテーマは「ルソー研究」であった。それが1年でおわり、1950年から取り上げられたテーマは「フランス百科全書の研究」であった。研究班のメンバーは、歴史、哲学、文学、生物学、経済学、人類学、美学など、さまざまな専門領域の学者で構成されていた。

『フランス百科全書』というのは、ディドロとダランベールを編者として、18世紀のフランスで刊行された百科事典である。これはヨーロッパの知的世界に大きな影響を及ぼしたものとして有名であるが、全35巻の全巻がそろいで人文の図書館に入っていた。研究班では、班員がそれぞれ手分けして専門的観点から重要な項目を読んできて、みんなの前で発表した。その後は、全員で共同討論をすることになっていた。

桑原教授の強力なリーダーシップのもと、研究会は約3年間にわたって続けられた。3年目はまとめの年で、班員はそれぞれの分担にしたがって研究成果を論文にまとめた。その成果は、桑原武夫編『京都大学人文科学研究所報告 フランス百科全書の研究』（岩波書店 1954年6月）として刊行されている。

梅棹は「フランス百科全書の研究」から桑原研究班に参加した。理学部動物学教室で研究を続けてきた梅棹は、ヨーロッパの生物学的思想史における百科全書派の位置に関する論文を書いたが、それは先の報告書に「第八章 生物学」として収録されている。ただし、論文は今西錦司、藤岡喜愛、牧康夫との四人の連名になっている。その理由は、直接の執筆者は個人でも、内容については共同討議をへているからであろう。

(4) 私的共同研究の誕生

桑原研究班のメンバーたちは、研究所の研究会のほかにいくつかの「私的共同研究」を持ちはじめていた。その一つが「大衆文化研究」グループで、桑原武夫、梅棹忠夫、鶴見俊輔、樋口謹一、藤岡喜愛、多田道太郎らがメンバーであった。当時、一般には、大衆文化などは学問的研究の対象にはならないと考えられていたが、鶴見俊輔は思想の科学研究会を主宰し、漫才、落語、歌謡曲、大衆演劇など、大衆文化の研究をも手がけていた。大衆文化研究グループでは「大衆文学」の例として吉川英治の『宮本武蔵』をとりあげ、それが読者にどう受け取られているかを分析した。

同じような趣旨で「日本映画を見る会」が組織された。メンバーには、桑原班の枠をこえて、日本部の井上清教授なども入っていた。この会では日本映画を見て自由な論評を加え、それが日本映画の質的向上に役立つことを目指していた。

桑原研究班から生まれたもう一つのグループ活動に「共同討議」がある。朝日新聞社の呼びかけで、林屋辰三郎、梅棹忠夫、多田道太郎、加藤秀俊の4人がチームを組み、日本文化の具体的な事項を取り上げては自由な討論を行った。それを学芸部の担当記者がまとめ、「日本人の知恵」という連載読み物として紙上に掲載され、好評を博した³⁾。林屋と梅棹は、当時はまだ人文の所員ではなかったが、後に所員となった。

この共同討議は、メンバーを一部かえながら、数年間つづき、いずれも単行本にまとめられている。

(5) 今西研究班とアフリカにおける類人猿研究

人文科学研究所の共同研究班は、その当初から一部一班で運営されてきた。西洋部は桑原研究班のみで、西洋部の教官全員と、学外から数人の研究者が参加していた。しかし数年のうちには、研究者たちの関心領域が広がってきたこと、研究班の運営が軌道に乗ってきたことなどから、1957年ごろには桑原研究班から分離独立して、複数の研究班が運営され

るようになった。そのひとつが今西錦司を班長とする「霊長類におけるカルチュアとパーソナリティ」の研究班である。

同じ西洋部の中であって、一方では『フランス百科全書』を扱い、他方では「霊長類」をとりあげるのは、いかにも奇異に思えかもしれないが、そこが人文の人文らしいところ、ともいえようか。

「霊長類におけるカルチュアとパーソナリティ」とは、また大風呂敷を広げたような大胆なテーマではあるが、じつは、これが後年のアフリカにおける「類人猿研究」のはじまりとなるものである。

1959年になると、人文に社会人類学部門が開設され、今西が初代教授となり、引き続き研究班を主宰した。テーマは先の研究の成果をふまえて、1963年からは「人類の比較社会学的研究」となった。このあたりから班員もいっそう拡充され、所内からは上山春平、藤岡喜愛、加藤秀俊など、所外からは梅棹忠夫（大阪市立大学）、中尾佐助（大阪府立大学）、和崎洋一（天理大学おやさと研究所）といったメンバーたちが参加した。研究会は、午後一時半にはじまり、まず1時間ほど班員の一人が自分の研究を発表する。そのあと全員が参加して白熱的な共同討議を展開するという方法がとられ、それが夕方まで続いた。

今西班の研究会では、高名な学者の説を敷衍したような発表をしても「よく勉強はしている」とはいわれても、そのようなものは研究とは認めてもらえない。評価されるのは、本人の経験と事実に基づいた仮説を提言することである。それが、班員によるはげしい討論をへて、はじめてしかるべき論文にまとめられる。

若い世代の研究者たちは、今西流学問の方法を深く学び、鍛えられた。ここで学者としての訓練を十分にうけ、それぞれの立場で全員が、学問はもとより文化の各分野においても、広く一般社会に貢献するための素養を身につけていった。

今西は主として人文系の学者の集団であった人文に、自然科学的思考を持つフィールドワーカーの人脈を持ち込んだ。これが人文の学際的研

究環境をととのえ、後に「新京都学派」と呼ばれる一連の学者たちの育成につながっていくのである。

桑原と今西という、ふたりの学者が人文で果たしたリーダーとしての役割には大きなものがあり、その学問的影響力は今日まで、各研究機関等における共同研究にもおよんでいる。

2 梅棹教授の研究班とその運営

1965年3月、今西教授が退官し、同年8月から梅棹が西洋部社会人類学部門助教授として就任した。梅棹は今西時代の共同研究班の運営をそっくり引き継いだ。これは1966年3月に、3年の期限がきたので、予定どおり、いったん解散された。

(1) 梅棹研究班の進展

1966年4月から梅棹は新しく発足する自分の研究班に「重層社会の人類学的研究」というテーマを掲げた。班には今西教授時代の人たちを中核に、若手の新しいメンバーが加わった。

班員の所属をみていくと、人文所内6名、京都大学7名（うち3名は大学院生）、他大学13名といったところである。

次は専門分野別でいうと、といきたいところであるが、これが少々複雑で簡単にはいいがたい。なぜならば専門といっても、出身学部と現在の研究分野が異なるうえに、研究歴の長い研究者であれば、さまざまな分野にわたる活動を展開している以上、「専攻または専門はなにになにに学」と、単純にはいえないのである。梅棹班長自身にしても、出身学部からいえば理学部動物学教室だが、その後の研究活動範囲をみると、文化人類学、社会人類学はいうにおよばず、家政学、言語学、歴史学、など多方面にわたる研究を続けている。要約すれば「文明学」ということになるのであろうか。梅原猛、川喜田二郎、加藤秀俊といったメンバーについても、当然、同じようなことがいえる。

「重層社会の人類学的研究」班と並行して「アフリカ社会の研究」班が生まれた。「重層社会の研究」は1969年3月でおわり、同年4月からは「文明の比較社会人類学的研究」がはじまった。班員にはテーマが変わるごとに多少の出入りはあったが、中核になるメンバーはあまり変わっていない。

文明班と相前後して、人類学の理論的研究をめざす「理論人類学の研究」班が生まれ、梅棹班は先のアフリカ班とあわせて3本立て同時進行となった。班員の人数はあわせて30余名に達していた。これだけの大所帯を抱えていたのは、人文の所内では梅棹班ぐらいのものであった。

(2) 梅棹班の共同研究会

「重層社会の人類学的研究」の研究会は毎月曜日に、「アフリカ社会の研究」は隔週木曜日におこなわれた。後者が隔週となったのは、木曜日には所員会（教授・助教授のほか、助手代表1名が参加する、いわゆる教授会）が月2回開かれたからである。三つ目の「理論人類学の研究」は1970年にはじまったが、これは月に1回、木曜日のアフリカ社会の研究会の1回分を割愛して、こちらにあてられた。

研究会のはじまる時間は午後1時半からであったが、1時頃になると、ひとり、ふたりと研究室にあつまり、お茶を飲みながらの情報交換がはじまる。研究会前の、この一見、無駄ばなしのような談話の時間が、人間関係の潤滑油として有効に働くのである。顔ぶれがほぼそろったあたりで、それでは、と会議室の方へ移動する。

当日の話題提供者による発表が一段落したところで、一休みとなり、その間に梅棹班では秘書がケーキと紅茶をだす。休憩がおわると、いよいよ討論が展開される。それはしばしば論争にさえなったが、おわれればまた、もとのなごやかな空気が支配するところとなり、いかに苛烈な論戦が繰り広げられた後であっても、しこりが残ることは絶えてなかった。通常、研究会というものはきわめて静かな雰囲気のうちに進められるも

のであろうが、ここではそういう風ではなかった。

用務員室と台所の奥にあった会議室からは、ときには大爆笑の声さえも聞こえてきた。秘書がお湯をもらいにいくと、用務員のおじさんが「あんたとこの先生の研究会は、いつもこうでっせ。人類学ちゅうもんは、よっぽど楽しいもんらしいですなあ」といったほどである。

梅棹は研究会を主宰することで、学問的にも大いに得るところがあったが、これらの研究班に参加していた、いずれも個性的な研究者たちと長年にわたり、定期的な知的会合をともにすることができたことを、大いに評価している。梅棹は人文時代を振り返って次のように書いている。

京大人文学研究所において、えたもののなかで最大のものは「ひと」であった。たくさんのすぐれた友人たちとの交遊は、まことにたのしいものであった。また、わたしとともに仕事をして、わたしをささえてくれたたくさんの友人たちのこともわすれることができない。(『研究経営論』「人文でえたもの」128ページ)

(3) アモルファスな知的集団

大学や研究所等の組織に所属することを公務とすれば、その建前とはべつに、それらに所属する研究員には、あわせて本音ともいうべき私的な人間関係が必要である。それをかりに、ここではアモルファスな集団とよんでおく。なぜアモルファスかといえば、これは人びとの不定形な関係を意味するからである。

正式な所属関係が公的なものであるとすれば、アモルファスな集団は私的なもので、いわば交友関係のようなものである。この種の集団を維持し、その活動を発展させていくためには、それなりの創意と工夫が凝らされなければならない。

この集団の中心にいた梅棹は教授ではあったが、講座制にまもられているような普通の大学の教授とは、大いに異なるところがあった。直系

の指揮下にいたのは1名の助手と秘書たちのみである。その他の班員はいずれも梅棹の命令系統には属していない自由な人びとであり、学問上の盟友ともいうべき存在であった。

盟友たちは野球の例でいえば、リーグ戦さながらに切磋琢磨をしつつ、研究生活に余念がなかった。研究行動を登山にたとえれば、ヒマラヤのどの高峰にのぼるか、という目的がまず設定された。それが各班の研究テーマである。班員は登山隊員よろしく山頂に向かうのであるが、登攀の単位は各個人である。その間、山頂にいたるまでの連絡は密におこなわれる。全体としては共同作業であるが、その中で働くのは個人なのである。

共同研究者たちのコミュニケーションの流通を円滑にするために、梅棹研究室はじつに有効に働いた。

コミュニケーションをよくするために梅棹班では研究室にメールボックスを設置した。定期的に立ち寄ることが可能なメンバーたちには、研究会の開催通知はもとより、本の購入等のこまごまとした個人的な用務にいたるまで、メールボックスが連絡の手段に用いられた。その他の人には、郵便と電話連絡で用をたしていた。

梅棹研究室では、所内の研究班活動のほかに、若手の人類学徒や社会人のための自主講座として開かれていた近衛ロンド（正式名称は京都大学人類学研究会）や民族学会主催の研究会の事務局なども引き受けていた。会合にかかわる通信事務は研究室の秘書の仕事であったが、作業量が多く、特定のプロジェクトだけのために学生アルバイトを必要としたほどであった。

(4) 研究班の運営母体と秘書システム

1966年1月、梅棹は人文の研究室を石毛直道助手とともに、自分の研究班を運営する本拠地として整備した。研究室の開設に際して常勤の秘書を採用し、研究室のオフィス業務全般の運営をまかせることにした。

梅棹は知的生産にかかわる環境や機能については、早くから関心を持ち、試行錯誤を繰り返していた。そのひとつが知的生産者にとっての秘書の役割である。

人文に移籍するまでの数年間は、週に何度か、自宅にアルバイトの秘書がきて、事務処理にあたっていた。この時代には、秘書にたいして梅棹が日常業務について、あれこれと指示を与えていた。個人の知的生産活動をしている限りにおいては、この方法でもそれなりに有効であった。しかし、今後は研究班という組織を運営しなければならない。考えたすえ、結局、研究室にはボスの指示を仰がなくても、自主的に考えて仕事がすすめられる秘書の存在が必要であるという結論に達した。そこでアルバイトではなく、常勤の秘書として採用されたのが、筆者であった⁴⁾。

梅棹は知的生産に必要な空間を、4つの機能に分化して考えていた。執筆のための空間、資料庫、材料置き場、それに事務コーナーである。これまでは、いずれも自宅に置かれていたが、研究室開設とともに機能の一部が研究所に移転された。それが事務用スペース、すなわちオフィスである。そこが秘書の働く場所となり、研究班の運営母体となった。

大学のささやかな研究室ではあったが、企業や団体であれば、総務部とか事務局といわれるような機能を持っていた。ここでの秘書の役割は、情報と人とのコーディネーター、つまり「調整役」であった。

秘書といえば、日本の社会では「お茶くみ秘書」という言葉が連想される。しかし、梅棹研究室の秘書の立場は、先の「調整役」、さもないければ「執事」的存在といえる。ちなみに執事とは、辞書によれば「身分の高い人の家や社寺などで、家事や事務を監督し、執行する職の人」⁵⁾である。しかし、執事という言葉の裏の意味というか本音の意味は「考え方のちがう人たちの集合体を、その中間にあって調整しながら丸く収め、かつ機能させていく役割」⁶⁾である。まさにその通りで、それが梅棹の求めているところであった。

梅棹は、組織を運営するものにとって、きわめて重要なのは「秘書」

であるといい、京大時代の半ばから「二人秘書制」をしいていた。

秘書については、梅棹には当初から明確な考えがあった⁷⁾。梅棹の著書『行為と妄想 わたしの履歴書』の「秘書教育」に、次のように述べられているので、引用しておく。

秘書は職場の花でもないし、お茶くみでもない。彼女たちはわたしの知的分身なのである。煩雑な各種の仕事をわたしにかわって処理してくれる人たちなのである。京大時代のある同僚は、わたしの研究室に秘書がふたりいることにおどろいて、「ふたりもの秘書にいちいち指示をあたえていたら、自分の仕事ができない」といった。当然のことである。

わたしは指示や命令はいっさいいさななかった。共同の目標がしっかり理解されておれば、仕事は秘書の創意工夫で遂行されるのである。なにからなにまで指示でうごく習慣になると、上司の指示がなければなにもしないということになる。わたしの研究室はボスの指示なしに、藤本秘書の自主的判断ですべて円滑に進行するようになっていた。まわりのものは彼女に「ボステス」というあだ名をつけていた。こうしてわたしは、より高次の判断業務に専念することができたのである。(中略)

わたしが海外出張や病気などで長期に留守をしても、業務はとどこおりなくすすめられた。(171ページ～172ページ)

このような梅棹式秘書システムに支えられて、研究班の運営は支障なく続けられた。そして1974年6月、梅棹が国立民族学博物館初代館長に就任すると同時に、このシステムはそっくり千里の館長室に移された。1994年3月、梅棹が館長を辞して後は、館内の一室に梅棹資料室が開設され、そこが現在のオフィスとなり、今にいたるも二人秘書制度はそのまま機能している。

3 人文のフィールドワーク

戦後の人文科学研究所における研究活動の特色をあげれば、おおまかにいって二つある。一つは「共同研究」、もう一つはそれを支える「フィールドワーク」である。

人文が中心になって行った海外調査研究活動に、学術調査隊の海外派遣がある。京都大学では、これまで国の内外を問わず多くの調査隊を派遣しているが、フィールドワークに重きをおく考古学や人類学の研究者たちは自らも企画を立てるなど、調査活動に熱心であった。

(1) 京都大学アフリカ類人猿学術調査隊

共同研究では先人たちの研究結果を援用しながらも、研究者独自の研究が尊重され、海外の文献の翻訳などはそれほど価値が高いものとは認められていなかった。したがって研究者たちは新しいフィールドを求めて、世界各地に出かけて行った。

今西がアフリカにおける野生の類人猿に関するフィールドワークに着手したのは、1958年のことであるが、1961年からは「京都大学アフリカ類人猿学術調査隊」という大規模な学術調査隊が企画された。これは京都大学の公式事業であり、全学的な委員会が組織されていたが、その受け皿となったのは今西の所属する人文科学研究所であった。

梅棹は1963年にこの調査隊の人類班に参加してタンザニアにわたっているが、今西に協力して立案の段階にあった初期のころから参画していた。このエクスペディションは大規模かつ長期にわたる調査で、文部省の科学研究費補助金海外学術調査費だけではまかないきれないため、関係者たちは有力新聞社や財界の各方面に、資金および物品の援助を依頼してまわった。このときに出会った人びととの縁が、のちに梅棹の諸方面における活動を支援する人間関係をもたらした。

このアフリカ調査隊から2年後の1965年に、梅棹が人文の所員になったことは先に述べたとおりである。

(2) ヨーロッパ学術調査隊

梅棹が担当する社会人類学部門は人文の西洋部に属していた。社会人類学の研究は主としてアフリカをフィールドにしていたが、なぜか所属は西洋部であった。これは西洋の列強がアフリカの諸国を植民地にしてきた歴史と無関係ではないのかもしれない。

西洋部の他の部門に属する研究者たちは、いずれも西洋の思想、社会、文化にわたる分野を研究対象としていた。梅棹は、桑原教授ただひとりを例外として、あとの人たち全員がそのときまで、一度もヨーロッパにいったことがない、という事実を発見した。ヨーロッパ生活をまったく体験することなく、主として文献によって研究生活を維持するほかはなかった時代なのである。梅棹自身のようなフィールド学派の研究者にとって、それは考えられないことではあったが、しかし、それが現実であった。

梅棹は西洋部の研究者全員がヨーロッパへ行くべきであると主張し、何とかして西洋部の人たちをヨーロッパに送り出す方策はないものかと考えた。このころは1ドルが360円、外貨持ち出しにも制限枠があった。結局、正攻法で行くしかないと考え、文部省科学研究費補助金海外学術調査費を申請した。アフリカ調査隊の例にならい、ヨーロッパにもそれを応用したのである。

ヨーロッパの農村をフィールドにして、西欧社会の基層文化の研究をするというのがその目的で、桑原教授を隊長とする学術調査隊の計画案を文部省に提出した。文部省を説得した結果、研究費がつき、第1次隊は総勢で8名が1967年の夏、ヨーロッパにおけるフィールドワークを開始した。行き先はイギリス、フランス、スペインの各地であった。第2次隊は会田雄次隊長ほか7名で1969年、フィールドはイタリア、ユーゴスラビアであった。第3次は同じく会田教授を隊長にして7名が参加、1972年のことであった。

3次にわたる調査隊の派遣によって、西洋部のほぼ全員がヨーロッパ

を体験するという目的は達せられた。これら一連の調査隊については、1977年に報告書⁷⁾が公刊されている。

4 学際的共同研究の運営

人文科学研究所における共同研究とその研究班の推移、フィールドワーク等について述べてきたが、人文がこの共同研究によって、数かずの学問的成果を生み出してきたことは、知的関心の旺盛な人たちには広く知られているところである。この方式はその後、今日にいたるまで、共同研究のモデルのひとつとなっている。

次には、その運営のあり方について考察する。

(1) 知的環境の整備

人文の共同研究のケースでみていくと、研究所内の正規の事業としての共同研究が、まずあった。その研究班はそれぞれの部門（学部の講座にあたる）の主任教官が班長になって組織した。それを公的共同研究とすれば、そこからいくつもの私的共同研究が派生した。いわば建前と本音である。当然のことながら、第一に重要なことは建前である。建前というのは、それなくしては研究活動自体が存在しえないもの、すなわち公的事業である。

とはいえ、公的事業である正規の研究テーマのみで研究者たちの知的好奇心は十分に満たされるものであろうか。必ずしもそうとはいえない。そこでインフォーマルというか、本音の部分が必要となる。世の中においては、何事であれ、建前のみ、あるいは本音のみでは、ことが満たされない。

エネルギーに満ちあふれた研究者の集団である人文においても、いくつものインフォーマルなグループ、すなわち私的共同研究会が自然発生的に生まれ、育ち、成長していった。研究班員の人間関係はきわめて自由なものであり、そこでは知的社会が形成され、談論風発の知的会話が

交わされていた。そういう相互啓発によって班員たちが触発され、次の段階へと進むことができた、ということがいえようか。

(2) リーダーの要件

インフォーマルな人間関係に基づく研究活動が可能であったのは、たとえば桑原武夫において典型的に見られるごとく、リーダーたちの人間にたいする好奇心が旺盛であったからである。その具体的な現れとしては、リーダーたちがいずれも談話を好んだことがあげられる。リーダーには人を見る目、すなわち人間観察力が必要であるが、今西錦司、桑原武夫、そして梅棹忠夫にいたるまで、その系譜は連綿として受け継がれている。

人間関係において重要な潤滑油は、やはり社交精神、平たくいえば人づきあいの良さ、である。そのためには談話力ともいうべきものがリーダーには備わっていなければならない。

リーダーにとってもっとも大切なことは包容力、いいかえると根気強さである。たとえば梅棹には若い人たち、まだ海のものとも山のものともわからない、学部の学生とも対等につきあう忍耐力があった。夕方、これから会合に出かけようとしている矢先に訪ねてきた学生がいたとする。今は時間がないので出直してきてほしい、と頼んでもいい場面である。しかしながら、梅棹は学生の話をついじくりと聴く。これから出る予定の会合には遅刻することになるが、それでもまずは目の前にいる学生を大切にするのである。

そういうことがあってこそ、リーダーとしての人望も自ずから備わってくるというべきであろう。ただし、それにはリーダー本人に、自他共に認めるほどの実力が必要なことはもちろんである。梅棹の場合、その会合に自分が到着しないことには、その会自体が用をなさないことを自覚していたからではあるが、いずれにせよ、遅刻はしても出ると約束した会には、ともかく出席するように努めていたことはいうまでもない。

(3) 研究活動の建前と本音

共同研究そのものを建前とすれば、その運営は本音の部分である。

上からの命令で研究活動が展開できればこんな楽なことではない。しかし、学術研究はこれこれのテーマで研究をすべし、と上司が命令してできるようなものではない。研究者本人がテーマをみつけ、研究活動にあたるのが本筋である。ただし、野にあって研究活動を続けている独学者は別として、研究機関に所属する正規の研究者にあっては、大学院における指導教官などに相談し、指導を仰ぐこと等は必要なことである。

独学者には、それこそマイペースによる独自の研究が可能であるが、得てして学問の本道からはずれやすい。ときには、在野の学究ならではの独創的な研究成果があがることもあるが、やはり先学の指導を得た方が効果的に学問の進展に寄与しやすいことは認めざるを得ない。そこにも大学等の研究機関が存在する意義があるのである。

研究自体は建前の部分であり、その研究活動を運営していくについては、研究者同士の本音のつきあいが不可欠となる。その必要性は、研究会や会議が開きになったあと、二次会、さらには三次会と本音の度合いが増していくことにおいて見られる。本会議だけで帰っていく人、二次会まではつきあう人、さらには三次会まで居残る人と、さまざまであるが、建前主義でいけば、これらはすべて不要な社交にすぎない。しかしながらこの二次会が人間関係を円滑にし、ひいては組織全体を活性化し、その知的生産力をあげることに貢献しているのである。

(4) 予算配分のプール方式

日本の社会においては基本的なところで一種の平等主義が支配している。たとえば義務教育においても、生徒たちが運動会で競争して負けても、そのことによる敗北感を味わわなくてもすむように配慮されている。それに似たことは高等教育機関である大学においても見られることで、たとえば研究費も各講座平等に行き渡るように配分される。どこかの講

座が予算の独り占めをするようなことがあってはならないのである。

ところが人文においては驚くべきことに、予算の配分は原則としておこなわれなかった。研究所全体の予算が、いわばひとつの財布でまかなわれていたのである。年度はじめには予算全額の執行案が所内に公示され、変更の必要が生じた場合には、修正案が示された。いいかえると、全額がプールされていたのである。ただし、若干の例外はあり、社会人類学部門は文部省の予算においては実験部門とされていたために、通常の部門よりはかなり多かった。そのため社会人類学部門には他部門よりは、いささか多い配分がなされていた。その増配分は実験講座費とよばれていたが、大半は研究室の臨時職員の人件費にあてられた。

図書費、複写費、写真代などは、東方部、日本部、西洋部のそれぞれに共通の委員会があって、使いかたをきめていた。

部門制の壁をなくした予算執行方法によって、必要とするところには多く、そうでないところには少しというように、研究費は必要に応じて効率的に配分された。学部で通常行われている方式では、各講座平等に配分される結果、末端ではそれぞれわずかな金額となり、思い切った研究活動ができない。そのことについて梅棹は次のように述べている。

わたしが京大人文学研究所からえたもうひとつのものは、組織の運営にかかわるものである。研究所は、その点については一般の大学の常識から見るかにはなれて、独創的かつ先進的な運営方法をたくさんもっていた。わたしはここでそれを身につけたといえる。

(『研究経営論』所収「人文からえたもの」129ページより)

まえの秘書システムと同様、梅棹は国立民族学博物館でも開館のときから「人文方式」による共同研究システムを取り入れた。予算の配分についても「一括プール制」を採用した。その結果、民博はその後20年間にわたって、めざましい学問的成果をあげている。

5 研究活動と知的生産

学問の王道は研究活動それ自体にある。学問というものは本来、自らに問い、学び、研ぎすまされた知性をもって、その学問を究めることに尽きる。

(1) 研究成果の社会還元

科学とは、何らかの専門学科であり、学問の一部である。科学者は単に「学者」というよりは、せまい領域の専門分野に従事している。ただし、学者が研究生活に従事しているだけでは、他の人にその社会的存在意義が理解できない。やむをえず、時にはその研究成果を公刊せざるを得ないわけである。そこで知的生産が必要となってくる。

脳内活動中心に見ていけば、何事かを学ぶことこそ、知的活動そのものなのである。何故かといえば、大脳を刺激し、情報や知識を吸収するということが、すなわち、脳内における生産活動に他ならないからである。未知のことを学ぶのが楽しいのは、大脳が次つぎに刺激され、退屈している暇がないからである。

それに反して、人にもものを教えるということは、どちらかといえば、そういう刺激に乏しいことである。理由は、本人にすれば、自分がすでに知っていることを人に伝授することにすぎないからである。教師の仕事があまり面白くないのは、知っていることを繰り返し繰り返し外に出すという、単純作業に他ならないからである。教育職というのは、その点では研究職を兼ねていない限り、あまり楽しいものではない。

大学においては、教員は教えるのみではなく、あわせて研究活動もしなければならない。教師はこの研究職を兼ねていることにおいて、知的活動に従事することができる。もちろん、人に教えることも知識の伝達に終わることなく、教えること自体に意味を持たせ、教授法に創意工夫を凝らし、一種のパフォーマンス、すなわち芸の域に達するようにすれば、それはそれなりに楽しい仕事ではある。

その点、人文科学研究所の場合は、教育職にありながら教官たちは、もっぱら学問の研究に打ち込んでいることが公認されているという、まことに恵まれた環境にあった。もっといえば、世の学者には羨ましい研究機関、まさに「学者天国」あるいは「極楽そのもの」と呼ばれてもいい存在であった。したがって、研究三昧にふけていさえすれば、学者本来の役目は果たしていることになるのであるが、しかし、それでは納税者のみなさまに申し訳が立たない。

そこで知的生産物をもって、社会還元となすわけである。たとえば、研究成果の一端を、学術情報として世間に発表する。それがとりもなおさず研究報告書の刊行であり、公開講座の開催である。人文においても、夏期公開講座などが開かれ、市民たちが大勢聴講に押しかけてくる。これはいわば、コレージュ・ド・フランスの京都版といえよう。

(2) 脳内現象と知的生産の関係

ところで、ここで一つ、考えておかなければならないことがある。

これらの知的生産、あるいは知的発表活動は一見、きわめて生産的な行為と見える。しかし、大脳の側から考えれば、実態は知識を排出しているのであるから、このときは脳内消費がさかんに行われているということである。

世の中には一見、プラスの行動と思われることが、じつは本質的にはマイナスの行為であることが多々ある。たとえば、大脳活動にとってはマイナスの行為である脳内消費活動が外在化し、知的生産物として提示されると、そこでプラス価値に転じる。それが記事や論文、あるいは論文集等の刊行物となり、目に見えるかたちの知的生産物として認められる。その間、脳内においては大いに酸素が消費され、生産者本人は心身ともに消耗する。知的生産活動が疲労を伴うのは、本質的にこれが脳内消費活動であるからである。

それに反して、学ぶことは他人から見れば時間の浪費、あるいは非生

産的な行為、と見なされがちである。たとえば、読書は単なる暇つぶし、あるいは知的消費と思われることが多い。しかし、外見では消費活動と見えることが、大脳においてはじつはプラス活動として、きわめて生産的な働きをなしているのである。読書は何時間でも連続してすることが可能であるが、同じだけの時間を執筆活動に従事することは、不可能ではないが、はなはだ疲れる行為である。

脳の内外で、プラスとマイナスが逆転するのが知的生産の実態である。とはいえ、現代においては研究機関に所属している以上、学者といえども、頭脳活動の本質には逆らうことになるが、知的生産物を公刊せざるをえない。ただし、脳にとってはマイナスのことが、社会的にはいかにもよく働いたと認められ、プラスの評価を受ける。脳にプラスとなる行為は、いわば「利己的」なものであり、逆にマイナスの頭脳労働は「利他的」な行いと見なすことができる。それがおそらくは、知的生産の成果が業績として社会的に評価され、時には授賞の対象となることもある理由ではなかろうか。

共同研究にあっては、参加者の討議が先にいうところの、大脳のプラス活動に相当する。このときはお互いの発言が脳を刺激しあい、脳内においては喜ばしい知的活動がなされている。これ自体は楽しい学問的行動ではあるが、この段階では目に見えるかたちとしての知的生産物は生み出されていない。生産を中心に見た場合は、何も生産されていない。研究会がおわってのち、この中から各自が何らかの成果を生み出さなければならぬ。つまり、脳内活動としてのプラスをマイナスに転じ、いわゆる知的生産に取りかからねばならないのである。

はじめに楽しみがあり、それから執筆活動という苦しみがやってくる。このようにして楽あれば苦あり、の活動が知的生産の表裏一体をなしている。共同研究会では参加者全員が大脳を楽しませ、次には個人個人が脳髓をしぼって生産にはげみ、社会的責任を果たすことになっているのである。学者個人が自分の書斎に閉じこもり、孤独な作業に従事するば

かりではなく、ときには共同で刺激しあうこともまた、相乗効果を生み、大脳生理の本性にもかなっている。

共同研究方式は情報の共有化という意味でも、情報産業時代にふさわしい知的生産の方法といえるであろう。

(3) 知的生産のツールと言語

人文の共同研究の過程では、知的生産に関するさまざまな新しい方法が試みられ、開発されていった。その具体的な例が、共通のテーマについて個人が持っている知識を、班員の共有財産とするために、B6サイズのカードを使う、といった方法である。カードを使うということは脳内活動の具体的な外在化、共有化を意味する。

梅棹の『知的生産の技術』(岩波新書1969年7月)が世に出たとき、カードは知的生産のもっとも基本的なツールとして人びとの関心を呼び覚ました。B6のいわゆる「京大式カード」はどこに売られているか、という問い合わせが研究室に殺到した。こうしてカードは知的生産に欠かせないツールとして認知され、自分でも早速、1万枚を発注した人もあらわれた。

LANやパソコン通信の普及、インターネットによる情報ネットワークの構築、といった情報環境の整備が、個人のレベルにまでゆきわたってきた現代では、情報の共有化が容易になり、知的生産の共同化・組織化が急速に進展する可能性が出てきた。とくに情報の共有化はインターネットによって、世界的規模で実現してしまった。ただし、知的生産の共同化・組織化がすすむためには、前提条件として関係者の間に共有する興味・関心の共通項がなければならない。

また、たとえ共通項があったとしても、それと関係者を結びあわせるためには「共通の言語」が必要となる。日本の国内においては、当然のことながら、すでに共通の日本語がある。それと同じ意味での世界の共通語は、今のところ誰もが納得できるものとしては、みつかっていない。

もっとも、国際共通語としてはフランス語、ドイツ語、あるいはスペイン語等が各時代、また各地域で広く使われてきた。現在ではとくに、英語が国際語の役割を果たしている分野が多い。インターネットでは英語しか通用しないと、誤解している人もないとはいえないほどである。

国際的な共同作業をするときは、英語が共通語となることが多いが、インターネットでは英語しか使えないわけではない。漢字もソフトさえ双方のパソコンにインストールされていれば、通信は可能である。

さらにいえば、日本語もローマ字表記にすれば、日本語フォントが入っていないパソコンにも、入力できる。ということは、日本語は漢字カナまじり文という表記よりは、ローマ字書きの方がネットにのりやすいということである。しかしこれは、言葉というよりは文字表記の問題である。どんな言語でも、英語式アルファベット表記ができれば、電子メディアでのツールとして使用が可能なのである。その限りにおいては、共通の世界通用文字は確実に存在している。

(4) 電子ムラのコミュニケーション

マクルーハンが「世界がひとつの村になる」と予言した。これは着々と実現しつつある。EECがECになり、いまではEUの通貨統合の実現さえ、目前に迫っている。

古来、村社会には「寄り合い」、ないしは「長老会議」という文化があった。ネット上のムラ社会では、長老に限らず、共通のテーマを共有するものであれば、誰でも特定のプロジェクトチームを組み、どのような寄り合いも自宅にいながらにして現実のものとなる。

この現象はネットでは「仮想社会」、「ヴァーチャルソサエティ」と呼ばれている。人間が生きて活動している実社会を現実とすれば、それは確かに仮想かもしれない。しかし、言語を中心に見た場合はどうであろうか。

言語は果樹にたとえてみると、樹木全体を実社会とした場合、現に

「言の葉」ともいうように、木の葉ほどの実体しかないものである。木の實としてのリンゴそのものは、食べれば身を養うことができるが、それを意味する「リンゴ」という単語は、それが何語であれ、口に入れて食べることはできない。言葉はまったく腹の足しにはならないのであり、その限りにおいては、言語の実体は仮想というか、ヴァーチャルそのものである。

したがって、言語活動を中心に見た場合は、ネット上に存在する現象こそが現実である、ともいえよう。書かれたものであれ、話されたものであれ、言語表現による情報は、紙面や画面、音声等の媒体を介して伝達される。その目的は人間同士の脳から脳、あるいは心から心へと情報が伝わること、すなわち相互にコミュニケーション（通信・伝達の共有化）が成立すればそれでよく、それだけで所期の目的のひとつは達せられるのである。それから先のことは、言語というよりは文化全般の領域に属することであり、別次元の問題というべきであろう。

最後に、最近の情報環境の電子化による情報の共有化が、社会にどのような変化をもたらし、たとえば個人や組織の知的生産活動にたいして、どのような影響を及ぼすことになるのか、という問題が残る。しかしながら、これらについては今後の課題として、いずれ稿をあらためて考えることにしたい。

注

- 1) 梅棹忠夫『研究経営論』岩波書店1989年5月発行に所収
- 2) 京都大学人文科学研究所『人文科学研究所の五十年』1975年10月
- 3) この連載は林屋辰三郎、梅棹忠夫、多田道太郎、加藤秀俊『日本人の知恵』として、中央公論社から1962年9月に出版された。
- 4) このあたりの事情については、藤本ますみ『こんな上司と仕事がしたい—知的生産時代の現場秘書学』（TBSブリタニカ1985年）の第I部「秘書は頭脳の分身 —梅棹式秘書システムを考える」にくわしく書かれている

5) 『岩波国語辞典第5版』第2刷による。日本経済新聞1990年6月17日付朝刊に掲載された塩野七生のコラム「昔も今も」第57回の記事、【執事】〈人情の機微直視した制度〉には、「貴人のそば近くにつかえて事務や家事をとり行う人。使用人頭（がしら）」とある。

6) 日本経済新聞1990年6月17日付朝刊に掲載された塩野七生のコラム「昔も今も」第57回の記事、【執事】〈人情の機微直視した制度〉からの引用であるが、これにつづいて次のように述べられている。「秘書」の役割を考える参考意見として、ここに引用しておく。

「ならば中間管理職ではないかと言われそうだが、日本人の簡単に考える中間管理職ではない。日本の上と中と下は、上へ向かって交流する可能性を持っている。現在の「下」は、遅かれ早かれ「中」に進み、才と運に恵まれれば、「上」にもなれるのだ。このような社会では、上中下のちがいは単に年齢のちがいでしかない場合が多い。

一方、この種の交流の可能性がほとんどない社会ではちがいははっきりと考え方のちがいになってあらわれる。

イギリスは植民帝国であった。人種がちがい、肌の色もちがい、言語をはじめとする文化のちがう人々の集合体を、うまく機能させていかねばならなかったのである。間に立って調整する人が、どうしたって必要になってくる。この人々なしではすべてがギクシャクしてくるだけでなく上にある当人が「下」対策に心も身体も消耗しきってしまうことになったろう。

イギリスのエリートたちは、実に冷静な視点に立って、「執事」の存在理由とそのための出費を認識したのではないかと思う。彼や彼女たちの立居振舞いがいかにも紳士的でありえたのも、この種の問題から解放されていたからではないか。」

7) 梅棹は人文に研究室を開設する以前から、「秘書はボスの頭脳の分身（知的分身）である」とする考え方を持っていた。「頭脳の分身」として働くためには、ボスの性格、立場、仕事、人間関係などを、十分に理解していなければならない。そこで秘書には「ボスとチームを組み、継続して働ける人」を求めている。

研究室秘書として採用されるにあたって、藤本は梅棹から秘書についての考え方や、秘書に仕事の指示はいっさいしない、という方針についての説明をうけている。

研究室開設後、梅棹は年々仕事を増やし、2年後には第二秘書を採用した。このときから秘書は二人となり、以後、二人の秘書が協力して研究室の運営にあたった。梅棹はこの間、研究および執筆活動に専念し、さらには国立民族学博物館の創設等の仕事に打ち込むことができた。

このあたりのことについては、藤本ますみ著『こんなボスと仕事がしたいー知的生産時代の現場秘書学』（ティビーエス ブリタニカ、1985年）第I部「秘書は頭脳の分身ー梅棹式秘書システムを考える」、および『秘書学概論ー秘書の現場から理論へ』（ミネルヴァ書房、1994年）第I部 現場で働く秘書からの報告「秘書は頭脳の分身」などにくわしく記述されている。

- 8) 会田雄次、梅棹忠夫編『ヨーロッパの社会と文化ー京都大学ヨーロッパ学術調査報告』京都大学人文科学研究所 1977年3月

引用文献

- ・梅棹忠夫『知的生産の技術』岩波書店1969年7月
- ・梅棹忠夫『研究経営論』岩波書店1989年5月
- ・塩野七生コラム「昔も今も」57回【執事】〈人情の機微直視した制度〉日本経済新聞1990年6月17日付朝刊
- ・梅棹忠夫『行為と妄想 わたしの履歴書』日本経済新聞社1997年6月)

参考文献

- ・京都大学人文科学研究所『人文科学研究所の五十年』1975年10月
- ・今西錦司、梅棹忠夫、藤岡喜愛、牧康夫共著「第八章 生物学」桑原武夫編『京都大学人文科学研究所報告 フランス百科全書の研究』岩波書店1954年6月
- ・梅棹忠夫『情報管理論』岩波書店1990年
- ・藤本ますみ『こんなボスと仕事がしたいー知的生産時代の現場秘書学』ティビー

エス ブリタニカ 1985年

- 藤本ますみ『秘書学概論－秘書の現場から理論へ』ミネルヴァ書房 1994年